

森とカテドラル

—der RHEIN と la SEINE の間で— 17

ギリシャとエトルリアの地中海文化の影響を色濃く受けたBC5世紀頃の西ヨーロッパケルト文化だが、マルヌ川流域からモーゼル川流域に目を転じると、そこにはまた違う力が強く働いているのが判る。ロレーヌ地方、モーゼル流域に並ぶナンシーやメッツに遺された物には東方の香りがいっそう強い。ここから川の流れて沿ってライン河に出れば、ケルト文化の東部分を通して、遙かスキタイにまで繋がっていく。ずっと後のことになるが、フン族のアッティラが西ヨーロッパに入ったのもモーゼル川を溯ってのことだった。

スキタイ。これもまた謎に満ちた民族だ。北東イラン語（インド・ヨーロッパ語）を話し、おそらくヨーロッパ系の風貌をしていたと思われる騎馬民族。金属工芸を能くし、動物模様を好んだ。ケルトの動物模様は、スキタイあるいはベルシャとの繋がりが指摘されている。ケルトが馬に牽かせた戦車を使い続けたのに対し、スキタイは鞍具を用いて騎馬のまま戦った。彼らの子孫の一部はやがて西ヨーロッパに移住することになる。

モーゼルの流れは、ナンシーのストゥール (TOUL) で西から東へ大きく方向を変える。太古、モーゼルは、そのまま西に流れてムーズ川に流れ込んでいたのだと言う。かつての流れに沿って車で走ってみた。20分ほど行くと急に左右が開けてムーズ川に出くわした。モーゼルより水量が少ないわりに、ゆったりと蛇行している。隘路をぬけて、開けた場所へと出る。

ライン河とセーヌ川の間で花開くケルト文化には、種々の文化が川を伝って流れ込んでいる。地中海からのソーヌ (ローヌ) 川、北海からのモーゼル (ライン) 川、そして英仏海峡からのセーヌ・マルヌ川。これらの源流が出会うブルゴーニュ、シャンパーニュ、ロレーヌ一帯が、文化の中心となる。



La Meuse

異文化が融合されれば普遍性が高まる、とは言えない。普遍性を獲得する道筋は、個人も文化も同じなのかも知れない。シャンパーニュへの旅から帰ってひと月ほどして、森有正はこの道筋について書く。

「作品が生み出される時、僕たちの存在は、互に本質を共有するようになる。自然とそして他の人間と。個の極致が俄かに普遍に拡大する。あるいは個の道が普遍の野に出るのである。これは根源的事実であり、それ自体説明の原理ではありえても、他からの説明によって、この事実の中に侵入することはできない。」 (流れのほとりにて)

日本に生まれ育った自分がどうしてサント・シャペルの玻璃窓にこころ打たれ、キリスト教音楽に感動するのかを考えると、人間の普遍性に思いが至る。その普遍性を今、ライン河とセーヌ川の間で起きた事にも感じている。

個から普遍へと開ける事実については、多くの人が証言している。宮沢賢治は農民芸術論のなかで、「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。」と、「自我の意識の進化」をうたう。

長い隘路をぬけ、光に包まれる体験を自分もしたことがある。十代半ばの頃で、はじめ何が起きたのか解からなかった。やがて人間の「根源的事実」であることを知り、その意識を持続するのが難しいことも知った。絵を描きたいと思った。新鮮な目で、ものを見続けていきたくかった。

画家 五味政明

現在、日本大使館広報文化センターで開催中の展覧会にて『森とカテドラル』1から5までの原画を展示しています。

7月19日まで 土日休館 12:30~14:00昼休